

Subject : **Japanese**Production of Courseware  
e-Content for Post Graduate CoursesPaper No. 02 : **日本語学 (Japanese Linguistics)**Module 14 : **否定表現 (Negation)**

ज्ञान-विज्ञान विमुक्तये

**Development Team****Principal Investigator:****Prof. Anita Khanna**

Jawaharlal Nehru University, New Delhi

**Paper Coordinator:****Prof. Prashant Pardeshi**

The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

**Content Writer:****Prof. Kazuyuki Kiryu**

Mimasaka University

**Content Reviewer:****Prof. Hideki Kishimoto**


Kobe University

Japanese

Japanese Linguistics

否定表現 (Negation)

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	否定表現 (Negation)
Module ID	JPN-P02-M14
Quadrant 1	E-Text

 ePathshala  
पाठशाला  
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

否定表現 (Negation)

## ひていひょうげん 否定表現

もくてき にほんご ひていひょうげん けいたいてきとくちょう ようほう  
**目的**：このモジュールでは、日本語の否定表現の形態的特徴および用法について

せつめい りかい ふか もくてき  
 説明し、理解を深めることを目的とする。

### 1. にほんご ひていひょうげん しゅるい 日本語の否定表現の種類

こうてい ひてい じたい ほんざい ほんだん あらわ  
**肯定・否定**とは、事態が存在するのかもしれないのかについての判断を表す「**みとめか**  
ぶんぼう こうてい ひてい たいりつ きょくせい よ にほんご  
**た**」の文法カテゴリである。肯定・否定の対立は「**極性**」とも呼ばれる。日本語の

ひていひょうげん ごいてき ひていけいしき ぶんぼうてき ひていけいしき ごいてき ひていけいしき  
 否定表現には、**語彙的な否定形式**と**文法的な否定形式**がある。語彙的な否定形式とは、

ふじゅうぶん じゅうぶん むけい かたち ふ ひ  
 「**不十分**」(＝十分でない)、**「無形**」(＝形がない)などのように「**不**」「**非**」

む み せつとうじ つ ご たい じゅつご つ  
 「**無**」「**未**」のような接頭辞が付いた語である。それに対して、「**ない**」が述語に付い

けいしき ぶんぼうてき ひてい あらわ  
 た形式は、**文法的な否定**を表す。

(1) ふじゅうぶん ごいてき ひてい それだけでは**不十分**だ。(語彙的な否定)

(2) じゅうぶん ぶんぼうてき ひてい それだけでは**十分**でない。(文法的な否定)

ぶんぼうぎ ひていひょうげん ちんじゅつ ふくし  
文法的な否定表現は、(3.) のように「けっして」「ちっとも」などの陳述の副詞と

こおう ごいてき ひていひょうげん ふくし こおう  
呼応するが、語彙的な否定表現は(4.) のように副詞と呼応することがないので、(4.) は

ひぶん  
非文である。

こんかい けっか まんぞく  
(3.) 今回の結果にはけっして・ちっとも満足ではない。

こんかい けっか ふまんぞく  
(4.) \*今回の結果にはけっして・ちっとも不満足だ。

ひぶんぼうぎ しめ  
(\* のマークは非文法的であることを示す。)

か いっけん ふく ぶんぼうぎ  
また、「欠かせない」「しかたがない」など一見すると「ない」を含むため文法的  
ひていけいしき み か たいおう こうてい けいしき  
否定形式に見えるが、「\*欠かせる」「\*しかたがある」のような対応する肯定の形式が

ひょうげん ひょうげん けいようし か ご ちんじゅつ ふくし こおう  
ない表現もある。このような表現は、形容詞化した語であり、陳述の副詞とも呼応  
おお  
しないものも多い。

## 2. 「ない」による否定

にほんご ぶんぼうぎ ひていけいしき じゅつご あらわ えいご めいし ひていようそ  
日本語の文法的な否定形式は述語に現れる。英語の **no** のように名詞に否定要素が  
っ ひてい あらわ ようそ じゅつご っ  
付くことはない。否定を表す要素は「ない」「ん」「ず」などがあり、述語に付く。

ふつうたい ばあい ていぬいたい ばあい ひてい けいしき すこ こと  
また、普通体の場合と丁寧体の場合で否定の形式は少し異なる。

## 2.1 普通体の場合

### 2.1.1 「ない」

「ない」はもったも基本的な否定辞で、動詞（例 5）、イ形容詞（例 6）、ナ形容詞（例 7）、名詞述語のコピュラ「だ」（例 8）のそれぞれの活用した形に接続し否定形をつくる。

(5.) 行く—行かない

(6.) 暑い—暑くない

(7.) 静かだ—静かでない

(8.) インド人だ—インド人でない

ただし、「ある」という動詞の否定形は「あらない」ではなく「ない」となる。（cf. 丁寧形の否定は「ありません」。）

また、「つまらない」や「くだらない」などの否定「ない」を含む表現は、イ形容詞であり、形態的に対応する肯定の動詞「つまる」と「くだる」と意味的に肯定・

否定の対立を表すことはない。そのため、「この話はつまる」や「この話はくだる」

という表現は意味をなさない。

## 2.1.2 「ない」ととりたて助詞じょし

けいようし      けいようし      ばあい      まえ  
 イ形容詞，ナ形容詞，コンピュータの場合，(9.) から (11.) のように「ない」の前に「は」  
じょし      お  
 「も」「さえ」などのとりたての助詞を置くことができる。

きょう      あつ  
 (9.) 今日は暑くはない。

げんき  
 (10.) それほど元気でもない。

いま      はな      だんかい  
 (11.) 今はそのことを話せるという段階でさえない。

けいようし      ばあい      しゅせつ      ふつう      じょし  
 ナ形容詞およびコンピュータの場合は，主節では (12.) のように普通とりたて助詞「は」  
い      おお      れんたいしゅうしよくせつ      つ      かたち      ふしぜん  
 を入れることが多いが，連体修飾節では (13.) のように「は」が付かない形も不自然  
 ではない。

(12.) ここはきれいではない。

ぼしょ      さ  
 (13.) きれいでない場所は避けたい。

ぶぶん      はな      ことば      へんか      おお  
 また「では」の部分は話し言葉では (14.) のように「じゃ」に変化することが多い。

たろう      さいきんげんき      げんき  
 (14.) 太郎は最近元気がじゃない。(＜元気ではない)

どうし ひていけい ばあい まえ じょし い  
 動詞の否定形をとりたてる場合は、「ない」の前にとりたて助詞を入れるのではな  
 くん、れんようけい じょし  
 く、「連用形+とりたて助詞+しない」というパターンになる。

(15.) わたし い い  
 私はどこにも行きはしない。(\*行かはない)

か こけい た  
 「ない」の過去形は、「食べなかった」のように「なかった」となる。

## 2.2 丁寧体の否定

ていねいたい ひてい  
 「です」「ます」の付く丁寧体の否定は、次のようになる。動詞のマス形の否定は  
 つ ていねいたい ひてい つぎ どうし けい ひてい  
 「ません」となり、いけいようし けいようし めいしじゆつご ばあい  
 「ません」となり、イ形容詞、ナ形容詞、名詞述語の場合は「ありません」となる。

(16.) た た  
 食べます—食べません

(17.) たの たの  
 楽しいです—楽しくありません

(18.) げんき げんき  
 元気です—元気で (は) ありません

(19.) がくせい がくせい  
 学生です—学生で (は) ありません

ひかくてきあたら かたち  
 また、比較的新しい形として「ないです」がある。



(20.) <sup>た</sup>食べないです。

(21.) <sup>たの</sup>楽しくないです。

(22.) <sup>げんき</sup>元気で (は) <sup>げんき</sup>ないです。元気がないです。

(23.) <sup>がくせい</sup>学生で (は) <sup>がくせい</sup>ないです。学生じゃないです。

「ないです」という形式は、<sup>けいしき</sup>主に口語で用いられる。<sup>おも</sup> <sup>こうご</sup> <sup>もち</sup> <sup>かいわ</sup> <sup>な</sup> <sup>けいようし</sup> くだけた会話ではナ形容詞と名詞述語では「ではない」が<sup>たんしゆく</sup> <sup>よ</sup> 短縮した「じゃない」のほうが良<sup>よ</sup>くつかわれる。「ません・ありません」の否定形は、<sup>ひていけい</sup> <sup>くら</sup> <sup>きはんてき</sup> 「ないです」に比べ、規範的なニュアンスがある。また、<sup>ひてい</sup> <sup>しゅうじょし</sup> <sup>ともな</sup> <sup>あつとうてき</sup> <sup>おお</sup> 「ないです」による否定は、「よ」などの終助詞を伴うことが圧倒的に多い。

<sup>ひてい</sup> <sup>つよ</sup> <sup>りょうしや</sup> <sup>ちが</sup> <sup>かん</sup> また、否定の強さについても両者に違いが感じられる。

(24.) <sup>しごと</sup> <sup>かんたん</sup> この仕事は簡単ではありませんよ。

(25.) <sup>しごと</sup> <sup>かんたん</sup> この仕事は簡単ではないですよ。

「ありません」のほうは、<sup>くら</sup> <sup>つよ</sup> <sup>ひてい</sup> <sup>ひび</sup> <sup>たい</sup> 「ないです」に比べて強い否定に響く。それに対して「ないです」は<sup>ひてい</sup> <sup>じゅうてん</sup> 否定に重点があるというよりは、<sup>ていねい</sup> <sup>じゅうてん</sup> <sup>お</sup> <sup>あいて</sup> <sup>はいりよ</sup> <sup>い</sup> 丁寧さに重点を置き、相手に配慮した言い方<sup>かた</sup> <sup>かん</sup> のように感じられる。



ていねいけい ひてい かこけい どうし

丁寧形の否定の過去形では、動詞は (26.) のように「ませんでした」または「なかつ

たです」となる。形容詞 (例 27) やコンピュータ (例 28) の場合は、「ありません」は「ありませんでした」に、「ないです」は「なかったです」のようになる。

(26.) <sup>た</sup>食べませんでした。・<sup>た</sup>食べなかったです。

(27.) <sup>たの</sup>楽しくありませんでした。・<sup>たの</sup>楽しくなかったです。

(28.) <sup>がくせい</sup>学生ではありませんでした。・<sup>がくせい</sup>学生ではなかったです。

### 3. 否定と呼応する表現

ふくし なか ひてい ひょうげん こおう

副詞の中には否定の表現と呼応するものがある。パターンは「X ...ない」で、X が

ひてい <sup>たいおう</sup> <sup>ていど</sup> <sup>あらわ</sup> <sup>すこ</sup>  
否定「ない」と対応し、1) 程度を表すもの「まったく、少しも、あまり、そんなに」

など <sup>ひんど</sup> <sup>あらわ</sup> <sup>ど</sup> <sup>など</sup> <sup>がいぜんせい</sup> <sup>かん</sup> <sup>はな</sup> <sup>て</sup> <sup>ほんだん</sup> <sup>あらわ</sup>  
等、2) 頻度を表すもの「めったに、1度も」等、3) 蓋然性に関する話し手の判断を表

すもの「<sup>かなら</sup>とても、<sup>など</sup>必ずしも」等がある。

(29.) そのことはまったく<sup>し</sup>知りませんでした。

(30.) 北海道へは 1度も<sup>ど い</sup>行ったことはありません。

(31.) 私にはそんなこと<sup>わたし</sup>とてもできません。

(29.) は、知識の程度が 0%であることを表している。(30.) は、北海道へ行った回数

(=頻度) が 0 回であることを表している。また、(31.) は、話者が自分の能力から

判断して、自分が話題となっていることをできる可能性がゼロであることを述べている。

否定と呼応する表現には、副詞以外にも「だれも」のような疑問語や数を含む

表現がある。疑問語の場合は「疑問語+も」という形になる。また、数詞の場合は、

特に 1 や 2 が使われる。

(32.) その家にはだれも住んでいない。

(33.) 教室には学生が 1 人も残っていなかった。

(34.) こんなに素晴らしい絵は、他に 2 つとない。

とりたての「しか」も否定と呼応する。

(35.) 山下さんはお茶しか飲みません。

にじゅうひていひょうげん

#### 4. 二重否定表現

にじゅうひていひょうげん                      かいふく   ひょうげん                      いみてき                      こうてい   ちか   いみ  
 二重否定表現とは、「ない」を2回含む表現で、意味的には肯定に近い意味だが、

たいおう                      こうてい   ひょうげん                      すこ                      こと  
 対応する肯定の表現とは少しニュアンスが異なる。

じかん                      じかん  
 (36.) 時間がなくはない。(≒時間がある)

(36.) では、「時間がない」ことを否定しているが、結果的に肯定の「時間がある」

ちか   いみ                      たん   じかん                      こうていひょうげん                      こと                      じかん  
 と近い意味になる。しかし、単に「時間がある」という肯定表現と異なり、時間があ

だんげん                      あいまい   たいど   あらわ  
 ることを断言しない曖昧な態度を表している。

にじゅうひていひょうげん

二重否定表現は「なく {は/も} ない」「ないこと {は/も} はない」「ないで

{は/も} ない」のように、「ない」の前に対比の「は」や「も」を含む事が多い。

また、(37.) のような「なければならない」は形式上二重否定表現だが、意味的に

ぎむ   あらわ   こてい                      けいしき  
 は義務を表す固定されたモダリティ形式である。

あす   あさ   じ   お   しごと   い  
 (37.) 明日は、朝5時に起きて仕事に行かなければならない。

なに ひてい  
**5. 何が否定されるのか**

きほんてき ひていぶん ぶん あらわ じたい せいりつ ひてい たと  
 基本的な否定文は、その文が表す事態の成立を否定する。例えば、(38.) では、

しゅくだい じたい せいりつ あらわ  
 「宿題をする」という事態が成立しなかったことを表す。

たろう しゅくだい  
 (38.) 太郎は〔宿題をし〕なかった。

ぶん いちぶ しょうてん あ ようそ ひてい ばあい  
 しかし、文の一部だけに焦点が当てられ、その要素のみが否定される場合もある。

たと あと ぶん つづ  
 例えば、(38.) の後に「ゲームをしていたのだ。」という文を (39.) のように続けると、

しゅくだい じたい ひてい しゅくだい ぶぶん とく ひてい  
 「宿題をする」という事態が否定されるのではなく、「宿題を」の部分が特に否定される。

とき たろう しゅくだい  
 (39.) あの時、太郎は〔宿題をしてい〕なかった。ゲームをしていたのだ。

ばあい かこ ひてい ほんい よ ひてい  
 この場合、〔 〕で囲われた否定がおよぶ範囲をスコープと呼び、否定のスコープの

ちゅう とく ひてい たいしょう ぶぶん しょうてん よ しょうてん ない ばあい  
 中で特に否定の対象となる部分を焦点と呼ぶ。焦点がスコープ内にある場合は、

かせん しめ  
 下線で示す。

## 5.1 述語とともに否定される要素

普通ふつうの否定文ひていぶんでは、述語じゆつごと結び付きむすが強い要素つ（ガ格つよで表ようそされる主語かく，ヲ格あらわやニ格しゆごで表かくされる述語かくの補語かくなど）は、述語じゆつごとともに否定ひていされやすい。以下の例いかでは、それれいぞれ「雨あめが降ふる」「東とうきよう京いに行く」「僕ぼくにお小遣こづかいをくれる」という事じたい態せいりつの成立ひていが否定ひていされている。

(40.) 今日きようは、雨あめが降ふらなかつた。

(41.) 太郎たろうは、東とうきよう京いに行いかなかつた。

(42.) 今日きようは、おじさんぼくは、僕こづかにお小遣こづかいをくれなかつた。

また、事じたい態おが起ぼしよこる場じかん所げんいんや時ようたい間じたい，原ふずい因じようきようや様あらわ態あらわなど，その事じたい態ふずいに付じようきよう随あらわする状あらわ況あらわを表あらわす言ことば葉ぶんみやくは，文じゆつご脈ひていによつて述語じゆつごとともに否定ひていされたりされなかつたりする。

(43.) 太郎たろうは、風かぜ邪こえで〔声こえが出で〕ない。

(44.) 太郎たろうは、去きよねん年かぜ〔風かぜ邪かいしゃで会やす社やすを休やすま〕なかつた。

(43.) は、「<sup>こえ</sup>で<sup>で</sup>「<sup>じたい</sup>声<sup>ひてい</sup>が出る」<sup>かぜ</sup>という<sup>こえ</sup>事態<sup>で</sup>のみが否定されており、「風邪で」は「声が出ない」

理由<sup>りゆう</sup>を表<sup>あらわ</sup>している。(44.) は、「<sup>かぜ</sup>風邪<sup>かいしゃ</sup>で<sup>やす</sup>会社<sup>じたい</sup>を<sup>ひてい</sup>休<sup>かぜ</sup>む」という<sup>かぜ</sup>事態<sup>で</sup>が否定され、「風邪で」

会社<sup>かいしゃ</sup>を<sup>やす</sup>休<sup>いみ</sup>む<sup>かぜ</sup>ことが<sup>ひてい</sup>な<sup>か</sup>った」という意味であり、「風邪で」も否定されている。

また、主題<sup>しゅだい</sup>や話者<sup>わしゃ</sup>の態度<sup>たいど</sup>を表<sup>あらわ</sup>す独立語<sup>どくりつご</sup>は、否定<sup>ひてい</sup>され<sup>ざんねん</sup>ない。(45.) の「残念ながら」や

「<sup>やまだ</sup>山田<sup>じゅつご</sup>さんは<sup>ひてい</sup>は、<sup>こ</sup>述語<sup>じゅつご</sup>と<sup>ひてい</sup>とも<sup>ひてい</sup>には否定<sup>ひてい</sup>され<sup>ざんねん</sup>ない。

(45.) <sup>ざんねん</sup>残念<sup>やまだ</sup>ながら、<sup>こ</sup>山田<sup>こ</sup>さんは [来] <sup>こ</sup>な<sup>こ</sup>かった。

<sup>じゅうぞくど</sup>従属度<sup>たか</sup>の高い<sup>じゅうぞくせつ</sup>従属節<sup>じゅつご</sup>は、<sup>ひてい</sup>述語<sup>ひてい</sup>と<sup>ひてい</sup>とも<sup>ひてい</sup>に否定<sup>ひてい</sup>され<sup>ひく</sup>ることが<sup>ひく</sup>ある<sup>ひく</sup>が、<sup>ひく</sup>従属度<sup>ひく</sup>の低い<sup>ひく</sup>

<sup>じゅうぞくせつ</sup>従属節<sup>じゅつご</sup>は<sup>ひてい</sup>述語<sup>た</sup>と<sup>た</sup>とも<sup>た</sup>に否定<sup>た</sup>され<sup>たか</sup>る<sup>たか</sup>ことは<sup>たか</sup>ない。例<sup>たか</sup>えば、(46.) では、<sup>たか</sup>従属度<sup>たか</sup>の高い<sup>たか</sup>

<sup>りゆうせつ</sup>理由節<sup>ひてい</sup>は<sup>ひてい</sup>否定<sup>ひてい</sup>され<sup>ひく</sup>ない<sup>ひく</sup>が、<sup>ひく</sup>従属度<sup>ひく</sup>の低い<sup>ひく</sup>「ながら」<sup>せつ</sup>節<sup>じゅつご</sup>は<sup>ひてい</sup>述語<sup>ひてい</sup>と<sup>ひてい</sup>とも<sup>ひてい</sup>に否定<sup>ひてい</sup>され<sup>ひてい</sup>る。

(46.) <sup>あぶ</sup>「危<sup>あぶ</sup>ない<sup>あぶ</sup>ので」<sup>あぶ</sup>〔<sup>あぶ</sup>歩<sup>あぶ</sup>き<sup>あぶ</sup>ながら<sup>あぶ</sup>〕<sup>あぶ</sup>スマホ<sup>あぶ</sup>を<sup>あぶ</sup>し<sup>あぶ</sup>ない<sup>あぶ</sup>で<sup>あぶ</sup>ください。

つまり、<sup>あぶ</sup>「歩<sup>あぶ</sup>き<sup>あぶ</sup>ながら<sup>あぶ</sup>スマホ<sup>あぶ</sup>を<sup>あぶ</sup>する」<sup>あぶ</sup>ことが<sup>あぶ</sup>否定<sup>あぶ</sup>され<sup>あぶ</sup>て<sup>あぶ</sup>おり、<sup>あぶ</sup>「危<sup>あぶ</sup>ない」<sup>あぶ</sup>という<sup>あぶ</sup>理由<sup>あぶ</sup>は、

<sup>あぶ</sup>「歩<sup>あぶ</sup>き<sup>あぶ</sup>ながら<sup>あぶ</sup>スマホ<sup>あぶ</sup>を<sup>あぶ</sup>しない」<sup>あぶ</sup>という<sup>あぶ</sup>事態<sup>あぶ</sup>不<sup>あぶ</sup>成<sup>あぶ</sup>立<sup>あぶ</sup>の<sup>あぶ</sup>根<sup>あぶ</sup>拠<sup>あぶ</sup>にな<sup>あぶ</sup>って<sup>あぶ</sup>いる。

## 5.2 否定のスコープと焦点

第5節の(39.)の例で見たように、文脈によっては事態の否定ではなく、スコープの中の特定の要素が否定される場合があり、特に否定される要素を否定の焦点と呼んだ。

述語とともに否定される要素でも、文脈による以外にとりたて助詞「は」が付いた場合、スコープの範囲が明示され、その要素が**否定の焦点**となる。

(47.) 今日きょうは、朝食ちょうしょくは食たべま] せんでした。

(47.) では、「食たべなかつたのは朝食ちょうしょくだ」という意味であり、「朝食ちょうしょく」が否定の焦点ひていとなっていて、「食たべる」という事態じたいは否定ひていされていない。

属格ぞっかくの「の」が表す名詞あらわも、スコープの中に入って述語とともに否定ひていされたりする

場合ばあいもあれば、否定の焦点ひていとなる場合もある。(48.)では、「日本語にほんごの先生せんせいだ」という

名詞述語全体めいしじゅつごぜんたいが否定のスコープひていにあたり、日本語にほんごの先生せんせいであるという事態じたいが否定ひていされて

いる。それに対して、(49.)は同じスコープたいを持つが、特に「日本語にほんごの」おなという部分もに

否定の焦点ひていが当たっており、何かの先生なにであること自体せんせいは否定じたいされない。



(48.) やまだ 山田さんは、 [にほんご せんせい 先生では] ありません。かいしゃいん 会社員です。

(49.) やまだ 山田さんは、 [にほんご せんせい 先生では] ありません。えいご せんせい 英語の先生です。

モダリティ形式の否定「のではない」「んじゃない」「わけではない」は、スコープの範囲を明示し、その範囲も広くなる。例えば、理由節は、(50a) のような普通の否定文ではスコープ外にあるが、(50b) のように「のではない」などにすると、スコープ内に入って否定の焦点となる。

(50.) a. だいどころ 台所にいたので、き 気づか] なかった。

b. [だいどころ 台所にいたので、き 気づいた] のではない・んじゃない・わけではない。

(50a) では「き 気づかなかった」理由を表しているが、(50b) では、き 気づいた理由が「だいどころ 台所にいた」ことではなく、べつ りゆう 別の理由であることを述べている。

### キーワード：

こうてい 肯定    ひてい 否定    ぶんぼう 米とめかたの文法カテゴリ    きょくせい 極性    ごいてき 語彙的な否定形式

ぶんぼうてき 文法的な否定形式    ひていけいしき 普通体    ふつうたい 丁寧体    ていねいてい 呼応    こおう 二重否定    にじゅうひてい 否定のスコープ    ひてい 否定の焦点

\*\*\*\*\*